

武蔵野女大短大 前原祥子

目的 絵画において歴史的伝承的故事をそのまま描くのではなく、時代概念、服飾などを超越して当世風に描いた見立絵は、浮世絵ではかなり早くからなされていたが、鈴木春信は古典画題を中心に見立ての手法で美人画を確立した。その美人画の流れをくむ第一継承者といわれている礒田湖龍齋についてその人となり、春信の模倣から春信没後、湖龍齋独自の絵画を展開するようになってからの作品について、見立てという観点からその中でも今回は湖龍齋の得意とした柱絵を中心に論を展開する。

方法 浮世絵に於ける見立て絵を時代をさか上ってしらべ、鈴木春信の見立ての手法として、説話、故事、因習的な画題、和歌などの文学作品があげられる。春信の模倣に始まった湖龍齋の作品を春信の作品と比較し、春信没後湖龍齋独自の作風を確立していった過程を浮世絵の作品を時代を追って検討する。次いで湖龍齋独自の境地を開いた柱絵を見立ての手法を中心にしらべる。

結果 フェノロサが彼の著で「湖龍齋は完全なる天才と称するを得ざれども懸物絵を作るには特殊の技倆を有し今日存する懸物絵の三分の二は殆ど其の手に成りしもののごとし」といわしめているように柱絵に彼の才能を発揮した。春信の作品は文学的抒情を中心とした王朝趣味的見立ての古典文学、謡曲あるいは中国の古典の古事等からのテーマを取った古典文学的であり湖龍齋もその流れ受けついでにはいるが、春信ほど古典文学のぞうしは深くなく、当時の風俗着物の文様や髪型に力を注いだ浮世絵画家であった。